



研究者とマラソン

ジーエルサイエンス株式会社の青山千頭様よりバトンを引き継ぎました。味の素株式会社イノベーション研究所の唐川幸聖と申します。青山様には、弊社でインハウスセミナーを開催していただいたのがきっかけで知り合い、私の上司が青山様の先輩であったことなども合わせて、その後親しくさせていただいております。カラムのメーカー様とユーザーという立場だけでなく、青山様には先輩のようなお立場で、最新の技術情報や勉強になる知見をお教えいただき、いつも勉強させていただいております。

このインハウスセミナーについて、弊社では年に数回、様々な分析メーカー様をお願いして、装置やカラムについて原理や使い方のコツ、新製品の紹介などをセミナー形式で開催していただいております。社内でも関心の高いUHPLCやコアシェル型カラムについての新しい技術の紹介や、新入社員を対象とした「HPLCとは」「質量分析とは」という基礎的な内容などメーカー様ごとに色々とアレンジいただいております。このインハウスセミナーは技術担当者の方から、直接詳しい説明が何えるということで、ユーザーとして大変有意義なものです。また弊社は、食品、医薬、発酵分野をはじめ様々な研究部門に分かれており、それぞれに分析の部署があります。研究棟が分かれているため日頃顔を合わせることが少ないのですが、インハウスセミナーの開催をきっかけに、これら分析部署の方が集まり、一緒に勉強して情報交換したり、互いに困っていることを相談したりできる良い機会にもなっています。ここで新しい人脈ができ、研究に生かされることも多いです。

さて、突然ですが話題を私の趣味「マラソン」に移させていただきます。ここ数年、マラソンがブームとなっており、老若男女問わずマラソン人口が増えてきました。2007年の東京マラソン開催で約3万人もの一般ランナーがフルマラソンに挑戦している姿を見て、自分にもできるかも、挑戦してみよう！と思い始めたのがブームのきっかけだそうです。私は10年前からマラソンをはじめました。これまでに九州の指宿菜の花マラソンや、関西の福知山マラソン、関東の荒川マラソンや館山若潮マラソン、海外のホノルルマラソンや万里の長城マラソンなど、13回フルマラソンを完走しました。会社でもマラソンサークルをつくり、週に1回会社の周りを7キロ走る練習会をしたり、休日にマラソン大会と一緒に出場したりしています。メンバーは現在80名ほどになり、仕事ではこれまで接点がなかった方とも、マラソンをきっかけに知り合うことができ、人脈を広げるよい機会にもなっています。今では他社のマラソンサークルとの交流も広がっています。皆様の中にも、マラソンが好き、大会に出たことがある、という方も多くいらっしゃるかと思います。なぜマラソンがこんなに研究者に好まれるのか、この機会に理由を考えてみることにしました。まず一つ目の理由は、「運動不足解

消、健康増進」だと思います。研究の仕事は実験室に籠って作業したり、デスクワークで調べものをしたりと、体を動かす時間が少ない方も多いと思います。運動の中でもマラソンは手軽にでき、着替えとシューズだけ準備しておけば自由な時間に一人でも走ることができます。次の理由は、「リフレッシュできる」からだと思います。仕事や研究で一日中頭を使っていると辛くなるときもありますが、走っている間だけ何も考えずリラックスし、自分の身体とゆっくり向き合うことで、心身ともに楽になり、また次も頑張ろうという気持ちになれる気がします。そして私が一番、研究者がマラソン好きな理由であり、研究と共通して魅力的だと思う点は、「自分で目標を立て、自分のペースで取り組んでいく」という点です。研究はまだ誰も知らないことを解明するという大きな目標に向かって長い道を進んでいきます。フルマラソンの大会で走っているとき、とても苦しくて、「もう二度と出ない」「マラソンは止めたい」と思うのですが、ゴールするとその達成感が今までの苦しみを忘れさせ、「また出たい」「もっと頑張っって次は記録を伸ばしたい」と思うようになるのです。不思議な感覚です。研究においても同じことが当てはまる気がします。様々な課題に直面して、この研究で成果を出すのは難しいかと途中で挫折しそうになっても、一つずつ課題を解決し、進めていくことで成果がでて、論文や学会で発表できたとき、改めて自身の研究を振り返り、周囲からの反響や自分自身で感じる達成感が、また次も頑張ろうという高いモチベーションにつながっていきます。ほかにも、マラソンは体力、忍耐力をつけることはもちろん、周囲にながされず自分のペースを保つ練習になることも研究者にとって大きなメリットではないでしょうか。ノーベル医学生理学賞を受賞された山中伸弥教授も趣味がマラソンだそうです。「ノーベル賞はマラソンに例えると折り返し地点、前半が基礎研究で、これから臨床応用というゴールに向けて後半を頑張りたい」とインタビューで応えていらっしゃいました。山中先生のご研究は、私から見ると、最先端かつスピード感のあるもので、短距離走のように全力ダッシュをして、ついにノーベル賞というゴールに到達されたように見えたのですが、山中先生にとっては、臨床応用がゴールであり、今後も足を止めずに走りつづけていくということなのです。走りつづける体力、忍耐力、ゴールを目指して一歩ずつ確実に進んでいく姿勢、私も見習い、人々の健康に貢献できる研究を進めていけたらと思います。リレーエッセイ、次はアサヒグループホールディングス株式会社の柿木様に引き継がさせていただきます。同じ食品会社の分析者として食の安心、安全に貢献するご研究をされており、いつもお手本にさせていただいております。柿木様、お引き受けいただきありがとうございます。

〔味の素(株)イノベーション研究所 唐川幸聖〕